

郷土資料館だより

Vol.40 No.2
2017.12.1

企画展「挿絵で見る江川太郎左衛門」開催中

●開催期間 平成29年10月28日(土)～平成30年2月12日(月・振休)

江戸時代後期から幕末にかけての葦山代官江川英龍^{ひでたつ}は葦山反射炉の建設、品川台場の築造、西洋式帆船戸田号の建造、代官支配地^{へだ}の民生安定など様々な分野で業績を残しました。今回の企画展では三島出身の児童文学作家、小出正吾^{こいでしんご}による伝記『江川太郎左衛門の話』とこの伝記のために描かれながら今日まで一般に公開されることがなかった日本画家、渡部菊二^{わたなべきくじ}による挿絵を中心に江川英龍の業績と当時の三島について振り返っています。その中から今回は英龍の業績と三島の関連を示す資料や場所について紹介します。

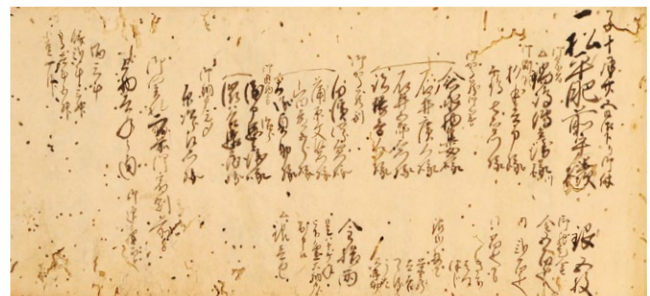
●佐賀藩主 鍋島閑叟^{かんそう}（直正）との三島宿での面会

鍋島氏の治める肥前佐賀藩は長崎港の防衛を担当しており、西洋砲術の導入に積極的でした。同様に西洋砲術の導入に関心をもっていた葦山代官との技術交流が盛んで、英龍と藩主鍋島閑叟は何回か面会しています。面会の場所は佐賀と江戸との往復の途上にある三島宿の本陣とすることが多かったようです。三島宿には世古・樋口2軒の本陣があり、2人がどちらで面会していたのかは明らかではありません。しかし、下の資料からもわかるとおり、佐賀藩は樋口本陣を利用することが多かったので、面会も樋口本陣で行われたのではないのでしょうか。

■御大名様御旗本様并二諸家御家老様方附込（樋口本陣家文書）

この資料は安永5年（1776）から天明6年（1786）までの10年間に樋口本陣に休泊した客の記録です。このうち佐賀藩主鍋島（松平）肥前守の休泊記録を拾っていくと

- ・安永5年(申年)10/28 江戸行 宿泊
- ・安永6年(酉年)3/4 帰り 休憩
- ・安永7年(戌年)10/26 江戸行 休憩
- ・安永8年(亥年)3/9 帰り 休憩
- ・安永9年(子年)10/25 江戸行 休憩
- ・天明元年(丑年)3/3 帰り 宿泊
- ・天明2～4年 記録なし
- ・天明5年(巳年)10/23 江戸行 休憩
- ・天明6年(午年)3月 木曾路



安永9年 松平肥前守の休憩記録部分

となっています。一般的に江戸時代の大名は参勤交代の制度により隔年で1年間江戸に住むことになっていましたが、佐賀藩（と福岡藩）は長崎警備を担っていたため江戸にいる期間が1年間ではなく、11月～翌年2月の4か月間という短期間に定められていました。

天明2～4年の間の事情はわかりませんが、それ以外は参勤交代の移動時には樋口本陣を利用しています（天明6年に日付なしで「木曾路」とあるのは、帰路に東海道を採らなかったということでしょうか。）。また、安永9年の記録中には「御目見例年の御上意有之候…」ともあり、佐賀藩は樋口本陣を定宿としていたようです。

●「農兵調練場址」記念碑（柏木俊一書、三島市役所内）

現在は「農兵節」の踊りで有名な農兵ですが、農兵とは農民より選抜され、洋式調練をほどこされた軍隊のことです。この農兵の組織化も英龍が幕府に建議した海防策のひとつです。しかし、武装することは武士の特権であり農民が武装すると一揆につながりかねない、などの理由でなかなか採用されませんでした。幕末には幕府や各藩によって採用されますが、英龍の建議がその始まりとされています。

葦山代官による農兵の組織化は英龍死後の文久3年（1863）に実現しました。調練は葦山・下田・富士川河原などで行われていましたが、のちに三島陣屋（代官役所の出張所。現在の三島市役所の場所）も農兵の調練場となりました。

各藩が組織した農兵はそのほとんどが大政奉還ののちに解散しますが、葦山代官支配下の農兵は明治に入ってから数年間も治安維持を目的として存続しました。

この記念碑の書は葦山出身の画家 柏木俊一によるものです。彼はまた、英龍によって抜擢されて葦山代官手代・手付となり、英龍死後は若き後継者である江川英敏・英武を支え、明治に入ると足柄県令を勤めた柏木忠俊の孫にあたる人物でもあります。



●三島に伝わる英龍の自画像



英龍は非常に多くの絵を残しており、その対象も富士山、風景、人物、魚・虫・動物、植物など様々です。自画像についても現代まで残されているものが何点かありますが、ここではそのうちの1点を紹介します。

この自画像は市内高木家に伝わるもので、郷土資料館がお預かりしています。高木家は三島宿に江戸時代から続く古い家で、この自画像を含め江戸・明治時代を中心に数百点の古文書や掛け軸などが残されています。江戸時代には江川家との交流があったといわれ、この肖像画も江川家に入入りしていた時に英龍本人に描いてもらったと伝えられています。

■江川英龍自画像（高木たつ江氏 所蔵）

次回企画展 平成30年2月24日(土)～6月3日(日)

企画展「新規収蔵品展」

平成27～29年に三島市郷土資料館が購入及び寄贈を受けた資料を紹介します。東京オリンピック(昭和39年(1964))の時の聖火リレーで着用したユニフォームや写真、三島茶碗、戦後の紙芝居、楽寿園・楽寿館を造営した小松宮の書、錦田の農家で使われた戦後の暮らしの道具、下田舜堂画伯の日本画「無題(富士山)」など貴重な資料が新たに収蔵されました。三島の歴史と文化の多様性を語る品々は一見の価値があります。

三嶋大社の古文書を読み解く2

◆足利尊氏の古文書① 後醍醐天皇の建武政権と足利尊氏

足利尊氏が発した文書は三嶋大社文書のうちに11通。同一人物が発した文書としては、所蔵文書のなかで最多です。鎌倉幕府を滅亡させた直後の**元弘3年(1333・正慶2年)**から、亡くなる3年前の**文和4年(1355・正平10年)**のものまで残り、その半生が追える点で貴重です。今回は最も古い**元弘3年8月9日の禁制**を読んでみましょう。

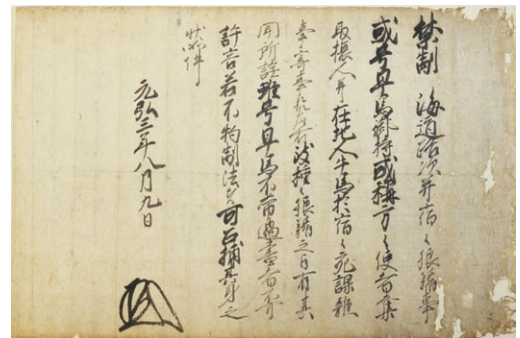
これは、街道や宿場での違法行為に対する禁令です。通信用の早馬の徴発、人々の雑役へのかり出しなどを、武将らが不当に行うことを禁じています。早馬の際は過書(過所)という通行書によって徴発されるべきこととし、違法徴発をする者の捕縛についても許可しています。鎌倉幕府の滅亡直後ですから、混乱に乗じた違法行為を禁じたわけです。為政者としては当然の姿勢ですが、時は後醍醐天皇を首班とする建武政権の成立期です。この法令について、当時の政治状況を加味して解釈すると、何が見えるのでしょうか。

鎌倉幕府の滅亡は、**元弘3年5月**のこと。後醍醐天皇側の勝利を決定づけたのは、天皇側を討する命を受けていた足利尊氏(この時は高氏と称しています)の反乱です。京都にある幕府出先機関の六波羅探題は5月7日、尊氏等の攻撃で陥落。さらに尊氏の誘いに応じた武士達によって、幕府の首都鎌倉、九州の鎮西探題、中国の長門探題が相次いで陥落し、幕府は滅亡しました。6月4日、後醍醐天皇が京都に入ると、建武政権が諸機関を立ち上げ本格始動します。しかし、京六波羅に布陣した尊氏も奉行所を開設し、続々上洛する武士を結集しつつありました。自前の軍事力が未整備の政権にとって、好ましい状況ではなかったでしょう。

実際、後醍醐天皇は、功績第一と認めた尊氏の遇し方に苦慮します。2か月ほどの間に、尊氏の位は従五位上から、従四位下、従三位と累進し、左兵衛督・武蔵守といった官職が与えられます。さらに天皇の本名である尊治から一字を下賜、この時、高氏から尊氏へと改名します。ただ、尊氏は政府内のポストに就かず、却って別格の存在感を示します。また武家の首都だった鎌倉は、足利方が独自に占拠し、関東の武士を傘下に収めつつありました。前後の史料からは、尊氏や弟の直義、配下の武将らが京都から東海・関東にかけて、守護・守護代、国司・目代などに列しているようで、東海道筋を足利一統が手中に収めているようにみえます。

こうしたなか**8月9日の禁制**が発せられます。元弘3年、尊氏の禁制は他に2点確認されますが、5月18日付けで京都東福寺と丹波金剛心院に宛てたものです。これらは六波羅攻めを始めとする足利方の直接の軍事行動に対する禁令です。それから3か月後、8月9日の禁制では宛先が示されず、街道筋に広く通達した指令書の1通のように見えます。建武政権がスタートしていますが、尊氏が実質的に管轄する地域で行った、独自の発令とみてよいでしょう。新たな武家の棟梁を自認する尊氏の意志が感ぜられます。

なお、今ひとつ不明な点があります。通常、三嶋大社に宛てる禁制ならば、境内域や神領域での狼藉を禁ずる旨が記載されるはずですが、内容は街道や宿での狼藉禁令で、宛名も無記載。先に広く通達したと推定したのはそのためです。しかし、現存文書がこの1通のみという点で判断を難しくします。おそらくは各地から上がる苦情、要請に足利氏側が応え、発令したものと思いますが、誰もが直接に交渉できるわけではないでしょう。近隣の宿などの要望を受け、三嶋大社が仲介に立ち足利氏への禁制要請を行っていた、という可能性をここでは指摘しておきます。(三島市郷土資料館運営委員・奥村徹也／三嶋大社宝物館 学芸員)



禁制 海道路次並びに宿々狼藉の事。
或いは早馬御持と号し、或いは方々使者と称し、旅人並びに在地人の牛馬を奪い取り、宿々に於いて雑事を死て課し、事を左右に寄せ、種々狼藉を致すの旨、其の間こえあり。所詮、早馬と号すと雖も、過書を帯せざるは許容すべからず。若し制法拘えずんば、其の身を召し捕るべきの状、件のごとし。

(足利尊氏)
(花押)

元弘三年八月九日

三島の歴史とジオポイント 11

— 守綱八幡神社 —

守綱八幡神社(日の出町6-10)は、三嶋大社から東へ約400m、旧東海道沿いの崖縁にあります。

神社の位置をジオの視点で説明します。基盤は箱根火山・海ノ平火山体の安山岩質溶岩(約27万年前)です。同溶岩は旧東海道箱根西坂の念仏石周辺や竹倉温泉の屏風岩などで観察できます。その上に箱根新規軽石流(約6.5万年前の巨大火砕流)が堆積し、その上に箱根西麓野菜を育む箱根西麓ローム層が厚く堆積し、さらにその上に御殿場泥流(約2,900年前に富士火山東斜面の大崩壊に伴う巨大土石流、数百年間にわたり何度も発生した)が堆積し、その表層に神社があります。

箱根火山西麓には西向きの尾根筋が何本も伸びています。神社の地下にはその一つが存在します。この尾根を東へたどると旭ヶ丘や山田小学校などに続き、いわゆる鎌倉古道が通っています。地下に埋もれた尾根筋の北斜面には市立公園楽寿園が、南斜面に神社があります。約1万年前に流下した三島溶岩流は北斜面側を埋め尽くしましたが、尾根に遮られ、神社側には分布していません。

神社の東側は約3mの崖で大場川に接してします。この崖は御殿場泥流の堆積が終了してから(約2600年前)、大場川の浸食によってつくられた新しい谷です。谷底は半ば段丘化した大場川の河川敷です。三島に伊豆国府がおかれた頃の河床面は現在よりも高く、河川敷を川が蛇行して流れていたと思われます。

守綱八幡神社の祭神は守綱大神です『田方神社誌』によると北面の武士・盛綱の霊を祀ったとされています。他説では、大場川が神社の崖下を流れていた頃、この辺りが船溜まりとなっていて、船をつなぐ綱を守る神を祀ったとされています。いずれにしろ、神社は幕末の安政地震で倒壊し、明治16年の大火で焼失したため、詳しい由来は不明です。現在の社殿は北伊豆地震(昭和5年)後の15年3月に再建されたものですが、境内の石碑には北伊豆震災で破損したので昭和6年8月に鳥居と社殿を復興したとの記載があります。境内中央の礎石群はその時のものでしょうか。

石垣は三島溶岩製、鳥居は安山岩質です。花崗岩製の玉垣で囲まれた境内には、御殿場泥流起源と思われる玄武岩質の大石と、3基の石燈籠があります。入口左右の2基は安永6年(1777年)に「三島新町曾我氏」が奉納したもので「奉納・守綱八幡宝前」とあります。基礎・竿・中台・笠は長岡凝灰岩上部層製(数百万年前、伊豆半島が南海の火山島群だった頃、噴火で海底に堆積した火山灰や火山砂が固結し、熱水の影響を受けてやや変色しているもの。産地は伊豆の国市北江間、通称・江間石)です。火袋は白色軽石が目立つ長岡凝灰岩上部層で作り直してあります。大社側の石燈籠の宝珠は長岡凝灰岩中～下部層(上部層よりも熱水的作用を強く受け、緑色に変色している)で作直してあります。2基の燈籠は北伊豆地震でも倒れ、火袋や宝珠が大破したようです。奥にある1基の石燈籠は「町内中」「常夜燈」「秋葉山」「弘化2年(1854)」などと彫り込まれていることから、神社近くの東海道筋にあった常夜燈が移設されたものです。本燈籠も宝珠や火袋は作り直してあります。やはり、北伊豆地震で倒れ大破したのでしょう。

改修前の大場川は、蛇行を繰り返し河川の勾配(流れ)も緩やかでした。守綱神社付近は伊豆国府に近く水運の津として機能していたでしょう。江戸時代初期には三島宿の東見附があったかもしれませんが。記録が残されていないのが残念です。

(郷土資料館運営委員・増島淳)



守綱八幡神社(石垣は黒い玄武岩、玉垣は白い花崗岩)



奉納燈籠(手前)と常夜燈(奥)

企画展「三島のたからもの—市の指定文化財を大公開！—」報告

- 開催期間 前期 歴史編 平成29年6月3日(土)～8月6日(日)
後期 美術編 平成29年8月8日(火)～9月10日(日)
- 会場 郷土資料館1階企画展示室 ●展示資料数 114点(前期90点・後期32点※重複あり)
- 入場者数 15,088人(前期8,352人・後期6,736人)
- 関連事業 展示解説 7/1(土)・16(日)、8/26(土)、9/2(土) 参加者合計69人
向山古墳群見学ツアー(詳細下記)



本企画展は、郷土の貴重な財産である市指定文化財の中から歴史資料と美術作品を中心に紹介したもので、会期を前後期の2期に分けて開催しました。

前期の歴史編では、箱根田遺跡出土の祭祀関連遺物(人面墨書土器、人形木製品等)、天正18年(1590)の小田原合戦に際して発給された豊臣秀吉の掟書や後北条氏滅亡直後に作成された検地帳、三島宿の歴史を知るうえで欠くことのできない世古・樋口両本陣家の伝来文書、江戸時代後期の伊豆国

全体が描かれた「伊豆国全図」、三島の近代化に大きく貢献した花島家の資料群等々を展示しました。

後期の美術編では、江戸時代の三島宿の様子を活写した《三島宿風俗絵屏風》(三島信用金庫蔵)や梅御殿の杉戸絵(《秋草鶉図》《経正竹生島詣図》《足柄山図》《郭子儀図》)、洋画家栗原忠二画《月島の月》、日本画家下田舜堂画《朝焼けの富士》および《小浜池》、人形作家野口三四郎の作品《水辺興談》《影ふみ》等々といった近代美術の品々を展示しました。

なお上記に挙げたもののほか、自然が育んだ文化財として、市内に所在する愛染院跡の溶岩流や三嶋大社の社叢、願成寺のクス、耳石神社のイタジイ、鏡池の横臥溶岩樹型等が市の天然記念物に指定されています。それら天然記念物については前後期を通じてパネル展示で紹介しました。

ご来場いただいた方からは、記録を書き残して保存してくれた先人のおかげで色々学ぶことができありがたい、こうした文化財をずっと残して行ってほしい、といった声を寄せていただき、文化財の保護についてより強く関心を持っていただけたようでした。



企画展関連事業「向山古墳群見学ツアー」開催報告

- 開催日時 平成29年8月30日(水) 8時45分～12時00分
- 内容 鉄剣(市指定文化財)が出土した向山古墳群を学芸員の解説つきで歩く
- 参加者 23人 ●講師 辻主任学芸員(郷土文化財室)、当館館長



企画展「三島のたからもの—市の指定文化財を大公開！—」の開催に合わせ、出土品が市の文化財に指定されており、現在史跡公園として整備されている向山古墳群(県指定史跡)の見学ツアーを開催しました。古墳群の各地区を徒歩で回り、各所で学芸員が解説を行うものです。

参加者からは、向山古墳群と大和王権との関係などに関心が集まり、勉強になった、当時の姿を復元してほしいなどの声も聞かれました。

「静岡県立美術館移動美術展『富士山と静岡ゆかりの画家たち』」報告

- 開催期間 平成29年9月15日(金)～10月15日(日)
- 会場 郷土資料館1階企画展示室 ●展示資料数 9点 ●入場者数 2,195人
- 関連事業 静岡県立美術館学芸員によるフロアレクチャー 9/24(日)、10/8(日) 参加者合計27人
静岡県立美術館ボランティアによるギャラリートツアー 10/1(日)・15(日) 参加者合計26人
- 主催 静岡県立美術館、三島市郷土資料館



本移動美術展は、静岡県立美術館が開館以来、同館のコレクションを鑑賞することの難しい方たちのために開催しているもので、三島市では8年ぶりの開催となります。同館の選りすぐりのコレクションの中から、日本近代洋画の大家和田英作が描いた富士山景や、三島で生まれ日英両国で活躍した栗原忠二など、静岡に縁ある画家の作品、計9点が出品されました。様々な事情から県立美術館にあまり足を運べないという方は少なくなく、今後もこのような移動美術展を継続してほしいといった声を多く寄せていただきました。

「キッズびじゅつ展 in みしま～こどものみた世界～」報告

- 開催期間 平成29年9月15日(金)～10月1日(日)
- 会場 郷土資料館1階多目的室 ●展示資料数 20点 ●入場者数 947人
- 関連事業 切り絵アーティスト福井利佐さんワークショップ 10/1(日) 参加者合計10名
- 主催 NPO法人キッズアートプロジェクトしずおか

県内の美術館・博物館など37館が協力する『キッズアートプロジェクトしずおか』の主催で行われたもので、加盟館の一つであるMOA美術館が実施している全国児童作品展の優秀作品の中から、過去に絵画の部で入賞した国内外の小学生の作品20点が展示されました。

本展は、訪れた子供たちが同世代の作品と、芸術家の手による作品との両方に触れることで、豊かな感性を育み、芸術文化をより身近なものとして感じてもらいたいという願いから、上記の移動美術展と会期を重ねて開催しました。来場した小学生からは、描き方や見方の違いで迫力が出ていてすごいという声などが聞こえ、刺激を受けた子も多かったようです。20代以上の来場者からも、子ども達の表現力・創造性の豊かさに驚く声が多数寄せられました。



両展合同オープニングセレモニー報告

- 開催日時 平成29年9月15日(金) 10時30分～11時30分
- 会場 郷土資料館前広場 ●参加者数 約60人



静岡県立美術館移動美術展とキッズびじゅつ展の同時開催を記念し、会期初日にオープニングセレモニーを実施しました。

当日は天候に恵まれ、鈴木文子市議会議長、杉澤正人市議会福祉教育委員長、西島玉枝教育長をはじめ、会場には多くの方にお集まりいただきました。まず県立美術館・キッズアートプロジェクトしずおかを代表して瀧昌光県立美術館副館長から、続けて三島市を代表して豊岡武士市長から挨拶があり、テープカットには迫田信行郷土資料館運営協議会委員長、キッズびじゅつ展出品者の吉田涼太さん(2005年外務大臣賞受賞)等にご参加いただき、盛会のうちにセレモニーを終えることができました。

切り絵アーティスト福井利佐さんワークショップ開催報告

- 開催日時 平成29年10月1日(日)13時～15時30分
- 内 容 デザインした文字を切り絵にする
- 参加者 10人(事前申込制、小学生対象、定員12名)
- 講 師 福井利佐氏(切り絵アーティスト)

9月15日(金)～10月1日(日)に開催した「キッズびじゅつ展 in みしま～こどものみた世界～」の関連事業として、国内外で幅広く活躍する切り絵アーティスト、福井利佐氏による小学生向けの切り絵ワークショップを行いました。

当日は、三島の「み」の字をベースに、子供たちが「三島らしい」モチーフのデザインを飾り付けていき、自分だけの「み」の字を切り絵にしていきました。参加者はとても熱心に作品作りに取り組み、子供たちの自由な発想と切り絵という手法により、たくさんの楽しい「み」の字ができあがりました。

最後は講師の福井利佐氏から、すべての作品に対する講評があり、楽しく充実した時間となったようです。



郷土教室・体験イベントの報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。平成29年7月から10月までに行った事業をご紹介します。

日 程	郷土教室	内 容	参加者
7月16日(日)	江戸時代の三島宿	三島宿の展示解説、紙芝居	82人
7月29日(土)	機織り体験 (講師：杉山洋子氏)	古い布を使った裂織の技法で機織りを体験する	12人
7月29日(土)	昔のくらし(回想法)	蚊帳、黒電話など昔の道具体験	94人
8月9日(水)	昔のあそび大会	コマ、ビー玉など昔の遊び体験	42人
8月22日(火)	型染め体験	紙を染めてポストカードを作る	21人
8月27日(日)	楽寿園の自然	葉っぱやどんぐりで工作	81人
9月2日(土)	江戸時代の三島宿	三島宿の展示解説、紙芝居	59人
9月24日(日)	昔のあそび	ブンブンゴマ作りなど	82人
10月1日(日)	切り絵ワークショップ	上記参照	10人
10月7日(土)	ワラでミニほうきを作ろう	ワラを利用したミニほうき作り	35人
10月21日(土)	古代のくらし	火おこし、土器を使ったクイズ (雨天により勾玉づくり中止)	5人



機織り体験



楽寿園の自然



ワラでミニほうき作り

寄贈資料の紹介

平成29年7月から10月までに、次の方々から寄贈のご協力をいただきました。ありがとうございました。（寄贈者の方の希望により個人名を伏せて表記しているものがあります。）

●寄贈資料

寄贈者	資料名	点数
石川 克彦氏（三島市）	写真画像データ（「李王殿下葬儀ノ魔除ケ」「三島町訓練所演習」ほか）	5点
谷本 公美子氏（函南町）	みちこ人形	3点
瀬川 眞氏（三島市）	三嶋暦、明治四年暦、野口三四郎筆年賀状、同作品集ほか	1式
個人（三島市）	下田舜堂画「無題（富士山）」	1点
個人（三島市）	オリンピア製ポータブルタイプライター、富士通製ワードプロセッサ	2点
大塚 忠良氏（三島市）	教科書、下駄スケート、矢立て、キセル、煙草盆ほか	14点
高田 保明氏（三島市）	古文書（「今般農兵御取立一件願書写」）	1点
下田 幸夫氏（裾野市）	東京オリンピック聖火リレー資料	1式
秋津 和恵氏（三島市）	色紙・書入りファイル、掛け軸、山下清直筆サイン入り複製画	3点



東京オリンピック聖火リレーで着用したユニフォーム・
委嘱状・手ぬぐい・バッジ
昭和39年10月6日、寄贈者は当時北中3年生
三島広小路駅西から新町橋まで走った



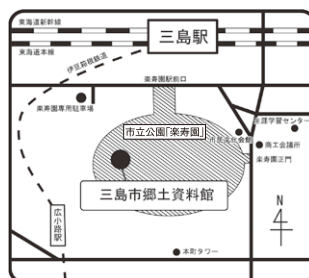
下田舜堂画「無題（富士山）」
昭和31年頃作成された三島市指定
文化財の「朝焼けの富士」とほぼ同
じ視点、構図や富士の朝焼けの色味
に違いが見える



下駄スケート
昭和30年代に山梨県で使われた下駄に刃と紐を
つけたもの

郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045
開館時間 午前9時～午後5時（4月～10月）
午前9時～午後4時30分（11月～3月）
休館日 毎週月曜日（祝日のときは翌平日）、
年末年始
入館料 無料（ただし楽寿園入園料として別途
300円がかかります。15歳未満は無料、
学生は学生証提示にて無料。）



三島駅(南口)から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.40 No.2(第119号)
発行日 平成29年12月1日(年3回発行)
編集 三島市郷土資料館
発行 三島市教育委員会
E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp
URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>